

若者の力は信ずるに足りる

— AIEJ/ユネスコ青年交流信託基金大学生派遣プログラムを実施して —



海外交流

関 達 治*

今回は、日本国際教育協会(AIEJ)のユネスコ青年交流信託基金大学生派遣プログラムによる学生達との研修キャンプを通して感じた、阪大の学生は素晴らしく将来が期待できることをお話ししてみたい。

国立大学法人化を控えて、これからの大学の国際交流をどのように発展させるべきかは大きな課題である。特に、我が国にとって、あるいは大阪大学にとって、どのように効果的に国際交流を進めるかが問われていると考えられる。冷戦後、米国一極集中化とグローバル化の流れの中で、ややもすれば先進国に顔を向けた交流が注目されているが、一方で、日本がアジアの一員としてどのように生きていくかも重要な課題である。これは、大阪大学のみならず日本の大学への留学生の大半がアジアからの学生であり、これらの学生の活力を如何に効果的に研究に生かしていくか、卒業生を我が国の将来の活動に如何に有効に生かしていくかなどの問題が考えられる。同時に、よく言われるように、日本人学生を如何に国際化させ、将来に国際的な場で活躍できる素養を身に付けさせるか大切な課題である。

工学研究科応用生物工学専攻は、本センターとともに、前述の将来への展開を含めてアジアに対して種々のプログラムを発信してきた。英語で教育をおこなう大学院特別プログラムなど、その主なプログラムは、既に本誌にも紹介されてきたところであるが、その主な活動はアジアの研究者や学生を受け入れることを中心に展開してきた。

今回は、日本国際教育協会(AIEJ)のユネスコ青



写真1 熱心に聴講する学生たち

年交流信託基金大学生派遣プログラムにより、本学の学生を外国に連れてゆく試みを行った。研修キャンプは、11月5日から25日までの3週間、タイ王国のマヒドン大学理学部に設置した生物工学国際交流センター東南アジア共同研究拠点で主に実施した。本学からは、工学研究科応用生物専攻と情報科学研究科バイオ情報工学専攻から選抜した12名の学生が、タイからはマヒドン大学、チュラロンコン大学など8大学から8名が、インドネシア、マレーシア、フィリピンからは各2名の計6名が参加し、総勢26名(主に学部と大学院前期1年生)の文字通り国際的な学生キャンプとなった。

生物多様性条約が発効して以来、遺伝子資源を含む生物資源の保存と持続的利用・開発に関する教育の普及と研究者育成が重要とされていることを踏まえ、研修では、「大学大学院における生物資源開発に関する科学・工学教育の改善」を主テーマに、「熱帯生物資源の保存と持続的利用」をサブテーマに、タイにおいて実地の体験を通して学生の自然科学に対する能力を高め、参加学生に科学・工学教育の新たなインセンティブを与えることを目的とし



* Tatsuji SEKI
昭和44年 大阪大学大学院工学研究科卒(修士)
現在、大阪大学生物工学国際交流センター、教授、工学博士
TEL 06-6879-7453
FAX 06-6879-7454
E-Mail seki@iob.osaka-u.ac.jp

た。研修プログラムは、20回の講義と5回の見学旅行、それと1回のグループ研修から構成した。日本からは、仁平卓也・センター教授、福井希一工学研究科教授と私が、また日本学術振興会のバンコク研究センター長の吉田敏臣名誉教授に多大のご尽力をいただいた。

さて、前置きが長くなったが、研修キャンプから感じたことを述べたい。11月5日、英語でのコミュニケーション取れるかなど不安と期待が混ざった気分で関西国際空港を出発したが、早くもその夜の夕食会で、色々な国の学生がワイワイと語っているのを見て、その不安は「キット何かを持って帰ってくれると」大きな期待となった。ホテルでは費用節約と交流のために、国の異なった相手と相部屋としたが、翌朝には結構仲良くやっていたのに、まずは一安心した。翌日の開講式の後には、英語による講義がぎっしりと詰まっていたが、日本の学生を含めて寝ることもなく熱心に聞いているのにはいささか驚いた。いつもの大学の講義では、いくら寝ないようにと努力しても、何人かは船を漕ぐのがあたりまえであるが、やはり緊張というものは大したものであると感心したりした。

第1週目の週末には、2泊3日でユネスコ世界遺産であり、古都であるスコタイ遺跡に出かけた。バスのなかからワイワイと始まり、遺跡に到着する頃には絶好調で、全てが大阪大学の学生かと思うほど一体となっていった。国際的というのは語学ができるということだけでなく、如何に理解しあうかが大切であることが如実に感じられた。

第2週の週末には、カオヤイ国立公園への自然観察ツアーが行われた。ちょうどヒルの繁殖時期であり防御のためのカバーをして自然林に立ち入った。それでも靴のなかから出てきたりしたが、実害はなかったようである。学生は、タイの研究者の指導を受け、サルの一種であるギボンを探すグループ、嘴の長い鳥であるホーンビルを探すグループ、自生するキノコを探すグループの3班に分かれ行動した。ギボンやホーンビルなどは食した植物果実の種を遠くに運ぶなど自然の維持に重要な役割を果たしているなどの説明を受けた。夜には、時にはトラも出るという、夜行性動物を見に出かけたが、残念ながら鹿ぐらいしか見られなかった。

最後に、3～4人に分かれて研究について討論す



写真2 カオヤイ国立公園の自然林の中で一休み



写真3 サヨナラパーティーでタイの学生と踊る研修生



写真4 開講式で修了証書を受ける学生

るグループスタディーが実施された。学生はマヒドン大学だけではなく、チュラロンコン大学、カセサート大学、キンモンクット工科大学、科学技術庁パイ

オテクノロジーセンターでそれぞれの指導者のもとに簡単な実験や研究についての討論を行い、その結果について最終日に発表会を行った。英語が得意な者、デザインの得意な者などそれぞれが協力しながらプレゼンテーションを準備し、前の夜などは徹夜に近い常態で協力していたのには、心が動かされた。最後には英語によるレポート作成などもあり、帰る間際まで遊ぶ暇もない常態であったが、本当によく頑張ってくれた感心した。

最初に危惧した心配は、最後には若い学生の素晴

らしい能力を見つけた喜びに変わって行ったことが何よりうれしく、阪大の学生は本当に素晴らしいとエールを送りたいと思っているし、また、先輩の皆さんにも期待してもらって良いと思次第である。

最後に本プログラムの実施にご協力いただいたユネスコ機関、タイの多くの大学の先生、政府機関研究所の研修者、見学を快く引き受けていただいた工場の関係者、資金的援助を頂いたタイ上野製菓、タイグリコの各社、ならびに本学関係者の皆さんに厚くお礼を申し上げます。

